

【展示報告】大学史特集展「駒大相撲部のあしあと」

津久井 美花子

はじめに

当館では、2022年4月から7月にかけて大学史展示室にて第24回大学史特集展「駒大相撲部のあしあと」を開催した。本展示は、駒澤大学相撲部の道場や学生相撲に関する資料を通じて、駒大相撲部の活躍と「あしあと」を辿るものである。今回、1.『駒沢大学相撲部史』から辿る相撲部の歴史、2.相撲部の稽古場・武田道場、3.駒大学生横綱の誕生という3つのテーマから展示を行った。

本稿では、展示の概要と本展示にて初出品した全国学生相撲大会の優勝者に贈られる「第49代学生横綱の日本刀」を紹介する。

1. 大学史特集展「駒大相撲部のあしあと」概要

(1) われらがあしあと『駒沢大学相撲部史』

駒大相撲部は、1929(昭和4)年に角道部として誕生した。創部当時の様子は『駒沢大学相撲部史』(以下、「部史」と略記)に記されており、相撲部の「あしあと」を追う貴重な記録である(駒澤大学図書館所蔵)。

「部史」は、相撲部OBであり、学生相撲やアマチュア相撲大会を統括する団体である財団法人日本相撲連盟の設立発起人でもあった⁽¹⁾石田堅丈によって編纂された。1929年から1968(昭和43)年までの「部史」は、一括して作成され、以降は毎年年度ごとに編纂され「昭和62年度」が最終巻となっている。その内容は、1929年の創部から1987(昭和62)年までの部の活動を記録するものであり、新聞記事や勝ち星が書き込まれた大会プログラム等がスクラップされている。その編纂の経緯を石田は次のように語った。「私は曾て卒業の春、『駒沢大学相撲部史』と題し、お粗末乍ら原稿用紙二〇〇枚綴(一冊)を三巻もの〔に〕し、後に続く人々へのせめてものしをりとして道場にのこした」が、戦時の混乱のなかで紛失してしまった。その後、戦後に「追憶・随想記を書きおきすることによって、現在の隆盛の礎となって卒えて行った人々や、不幸にして戦歿された仲間達のさ、やかなはなむけ乃至供養塔と考えて見たい」⁽²⁾というのが、「部史」を再び編む動機となったようである。

(2) 汗と鍛錬の場・武田道場

駒大相撲部の稽古道場は通称を武田道場という。その名の由来は、戦前の相撲部を支え戦後には荒廃した相撲部の再建に尽力した武田義一(1913-1961年)という人物であった。武田は、1931(昭和6)年に駒澤大学東洋科へ入学し、相撲部に入部した。「部史」は、「背がすらりと高く、色白ろで、顔だちのよい好男子であつたが、相撲そのものは、それ程でもない、しかし「武田の喧嘩哲学」流のすもう」で、新興の相撲部の基礎を作ったと武田の様子を伝えている⁽³⁾。卒業後は、常徳院住職となるも戦争末期には応召し中国にて終戦を迎える。帰還後、世田谷区議会議員の任に就きながら、荒廃した相撲部再建に尽力し、暫時の「監督」として後進の指導にあたった。



展示ポスター

武田は長年、相撲道場の再建を望んでいたが、念願果たせず1961（昭和36）年6月に没する。享年50歳であった。道場再建の遺志を継いだ妻・治恵は「夫の一周忌の追善供養のつもりで」と大学に改築費用を寄付し、1963（昭和38）年5月に武田道場が完成した。土俵開きには、花籠部屋⁽⁴⁾の関脇以下の力士が参加して初稽古を行っている⁽⁵⁾。本展示では、1967（昭和42）年に再建された二代目武田道場の「階段の踏み板」と「鉄砲柱」（いずれも当館蔵）を展示した。

武田道場から学生横綱、大相撲力士、数多くの学生力士が誕生した。2006（平成18）年までは駒沢キャンパスに置かれていたが、現在、武田道場は玉川キャンパスに場所を移している。

（3）駒大が生んだ学生横綱

1919（大正8）年に第一回大会が開催された全国学生相撲大会（後述）は、個人優勝制度を設け多くの学生横綱を生んだ。駒大は、相撲部が角道部と呼ばれていた1932（昭和7）年に全国学生相撲大会へ初出場を果たし現在まで2名の学生横綱が誕生している。とくに、1971（昭和46）年の第49回大会では、団体優勝と館岡儀秋（1949-2014年）の個人優勝で、創設以来の悲願であった完全優勝を果たした。館岡儀秋は、1968（昭和43）年に本学に入学した。卒業後は、1981（昭和56）年から相撲部の監督に就任し後進の指導に努めた。また、財団法人日本相撲連盟常任理事、国際相撲連盟常任理事などの要職を歴任した⁽⁶⁾。

展示では、館岡が学生横綱となった際に贈られた「第49代学生横綱の日本刀」（当館蔵）を展示した。次節にて詳述する。



大学史展示室

2. 初出品「第49代横綱の日本刀」

（1）資料受け入れまでの経緯

「第49代学生横綱の日本刀」（以下、日本刀）は、大阪府堺市から1971（昭和46）年に開催された第49回全国学生相撲選手権大会の個人優勝者である館岡儀秋に贈られたものである。館岡に贈呈された日本刀は2014（平成26）年の氏の逝去後、夫人の意向で駒沢大学総合研究部スポーツ・健康科学部門に寄贈された後、2018（平成30）年に附属品である桐箱、刀装具用袱紗、刀剣保存手入用具一式、銃砲刀剣類登録証とともに当館に寄贈された。

（2）日本刀の詳細

日本刀の長さは40.2センチメートル、反り0.4センチメートルである。刃の表裏には、「昭和四十六年十月吉日 正範」（表）、「第四十九回全国学生相撲選手権大会優勝者立劔」（裏）と銘文が刻まれている。桐箱の蓋裏には「優勝第四十九回全国学生相撲選手権大会 堺市」とある。



「第49代学生横綱の日本刀」

(3) 学生横綱の贈呈品

全国学生相撲大会は大阪毎日新聞社の主催により、1919年に大阪府堺市にて第一回が開催された。当初は関西圏の中等学校、専門学校からの参加が多くを占めていたが、回数を経るごとに出場校は北海道から九州まで広がり、文字通り「全国」学生相撲大会となった⁽⁷⁾。第一回大会から同大会の優勝校、個人優勝者には優勝旗と絹の横綱⁽⁸⁾が贈呈された。

1910(明治43)年に毎日新聞社に入社、社会部に所属した上田正二郎は、横綱贈呈の経緯を次のように回想している。第一回大会時に大阪毎日新聞社の相撲記者であった上田は「ふと協会相撲同様、最優勝者に横綱を相撲司家から授与して貰うことにしては如何」と思いたち、相撲行司の家元である吉田司家の二十三世吉田追風(本名・善門1855-1939年)を訪問した。吉田司家は、江戸時代から力士・行司を全国的に支配し、横綱免許の証状を与える役割を担っていた。二十三世吉田追風は、明治・大正・昭和戦前期の間、22人に横綱免許を授与した人物である。上田の依頼を受けた吉田追風は「横綱は協会相撲だけが独占すべきではない」との考えから学生相撲の優勝者に横綱を贈呈することを承諾した。学生横綱への横綱授与の発表があると、相撲協会⁽⁹⁾は「恰も横綱の権威が失墜したかのように解釈」し非公式に吉田司家に抗議を申し込んだという⁽¹⁰⁾。

以上の経緯によって、従来、相撲協会に所属する大相撲力士のみに送られていた横綱を学生相撲の優勝者にも同様に贈呈することとなった。学生への横綱贈呈に対する相撲協会の態度をみれば、学生相撲を相撲司家、横綱の持つ伝統によって権威付けることが可能であったと考えることができる。その点、全国学生相撲大会を主催した大阪毎日新聞社は、贈呈品一つとっても自社のイベントを盛り上げるべく工夫を凝らしていたといえる。

一方の日本刀は1952(昭和27)年の第30回大会を記念して大阪府堺市から個人優勝者に横綱とともに贈呈されるようになった⁽¹¹⁾。個人優勝者(学生横綱)に贈られる日本刀は大阪府堺市の水野鍛錬所が製作した。大会30回を記念する日本刀を製作したのは、水野鍛錬所の二代目・水野正範(号・源昭忠)であった。正範は、戦後の法隆寺の大改修の際には国宝保存工事に加わり、金具類、国宝五重塔九輪の四方にかけられている「魔除け鎌」を鍛錬し、これらを奉納している⁽¹²⁾。館岡に贈られた「第49代学生横綱の日本刀」も正範によるものである。

1952年以降、日本刀授与は恒例となり、毎年、堺市は水野鍛錬所に製作を依頼している⁽¹³⁾。

おわりに

本稿では、大学史展示「駒大相撲部のあしあと」の概要と初出品である「第49代学生横綱の日本刀」を紹介した。本展示の主軸である「部史」は、大学史の中で運動部のひとつとして相撲部の活動が記される例が多い中、一部活の年史が膨大な史資料により編纂された点で稀有な例である⁽¹⁴⁾。学内において、注目されることが少なかった部活動の歴史や活動を明らかにしようとする研究や展示⁽¹⁵⁾が各大学でなされている中、相撲部や学生相撲もその例に漏れず、より研究が活発化することを願いたい。

註

- (1) 1971年10月1日、財団法人日本相撲連盟「財団法人日本相撲連盟設立発起人会議事録」(文部省体育局スポーツ課『日本相撲連盟』〈国立公文書館、平11文部00014100〉)。
- (2) 石田堅丈『駒沢大学相撲部史 第一巻』(駒沢大学相撲部、1968年) 4頁。
- (3) 石田堅丈『駒沢大学相撲部五十年史』(駒沢大学相撲部五十年史刊行会、1979年) 70~71頁。
- (4) 花籠部屋は、1953年に設立され1985年に閉鎖された相撲部屋である。同部屋からは、第45代横綱若乃花幹士、第54代横綱輪島大士が輩出された。駒大相撲部は、師範として花籠部屋の力士を招いていた(1965年7月15日『駒沢新報』第80号)。
- (5) 1963年6月25日「鉄骨の新道場落成 若秩父を迎えて土俵開き」『駒沢新報』第47号。
- (6) 駒沢大学広報誌「駒大OB師弟対談 松鳳山裕也関×館岡儀秋相撲部監督」『Link』第3号(駒沢大学総務部広報課、2013年5月) 17頁。
- (7) 1928年11月17日付朝刊「第十回 全国学生相撲大会」『大阪毎日新聞』。

- (8) ここでは、横綱が土俵入りの際に締める綱を指す。横綱とは、力士の地位の最高位を指すものでもあるが、大関が力士の最高位であった頃までは、吉田司家から横綱を締めて土俵入りをする免許が与えられ土俵入りを行う者を「横綱」と呼んだ(金指基『相撲大事典』第3版、現代書館、2011年、335～336頁)。
- (9) 当時の相撲協会は、東京大角力協会と大阪角力協会とで東西に分かれていた。学生相撲個人優勝者に対する横綱贈呈に、東西どちらの相撲協会が吉田司家に抗議をしたのかは定かではない。1925(大正14)年に財団法人としての認可を受けた際、東西両協会は合併し日本で唯一の職業相撲団体である財団法人大日本相撲協会が設立された。大日本相撲協会の設立経緯については、拙稿「大日本相撲協会の設立と『相撲道』—大正末期の財団法人化を中心に—」(駒澤大学大学院史学会『駒澤大学大学院史学論集』第52号、2022年)を参照されたい。
- (10) 上田正二郎「吉田追風翁 学生相撲の横綱秘話」(『あの頃その頃』東京書店、1952年)53～54頁。
- (11) 1952年11月1日付「学生横綱に日本刀」『毎日新聞』大阪市内版。
- (12) 1959年6月21日付朝刊「ひとすじ 水ゴリで仕事に開眼 切れ味と取組み44年」『読売新聞』。
- (13) 2020年10月28日「学生横綱に渾身の脇差しを 堺の水野さん製作」朝日新聞デジタル (<https://www.asahi.com/articles/ASNBW6TSQNBVPPTB004.html>) 最終閲覧2022年10月21日。
- (14) 大学相撲部単独の年史としては駒澤大学のほかに、『明治大学相撲部100周年記念誌』(明治大学体育会相撲部、2005年)、『早稲田大学相撲部八十周年史』(早稲田大学相撲部、1999年)が各大学によって編纂されている。
- (15) 北口由望「戦前期日本におけるフェンシングの躍進—法政大学とフェンシング協会の活動に着目して—」(HOSEIミュージアム『HOSEIミュージアム紀要』第2巻、2022年)、4大学企画展示「神田発信! 大学スポーツの軌跡」(2021年、主催: 専修大学大学史資料室・明治大学史資料センター・中央大学大学史資料課・日本大学企画広報部、明治大学博物館特別展示室、明治大学中央図書館ギャラリーにて開催)など。また、2021年全国大学史資料協議会では、「大学スポーツ史とアーカイブズ」をテーマとして研究会が開催された(全国大学史資料協議会『研究叢書第22号 大学スポーツ史とアーカイブズ』2022年)。

(つくい みかこ 駒澤大学大学院人文科学研究科歴史学専攻修士課程)